

5 りんご
 地域慣行基準
 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	15	

(1) 特徴及び吸収特性

時期別の施肥窒素の樹体内転流配分を、図1に示す。何れの時期でも葉や果実などの新生部に多く転流するが、施肥時期が早いほど、その傾向が強い。

また、施肥時期が遅れるに従って、枝や幹への転流量がやや増え、特に根への転流が際だって増加している。施肥時期とその効果は、次のように整理できる。

ア りんごの**生育初期（展葉から6月）の窒素の吸収は、葉の展開、果実の肥大、新梢の伸長に強い影響を与えるので初期の肥効を確保**する。一方、窒素の過剰吸収は、着色不良も含めた果実品質低下の原因となることが多い。

イ **生育中期（7～8月）の窒素の過剰吸収**は、枝の2次伸長を助長するとともに、果実品質の低下、取りわけ**着色不良**をもたらすので、この時期に肥効が現われるような堆肥の過剰施用はしない。

ウ **生育後期（9月から落葉）の窒素の吸収**は、炭酸同化能力を高め、貯蔵養分を増加させる効果があり、翌年の花芽を充実させるなど、好影響をおよぼすことが多い。

なお、リン酸やカリは、窒素に比べ、施肥時期の違いが生育や果実品質に影響を及ぼすことはほとんどないので、基肥（11～3月）に窒素と同時に施用する。

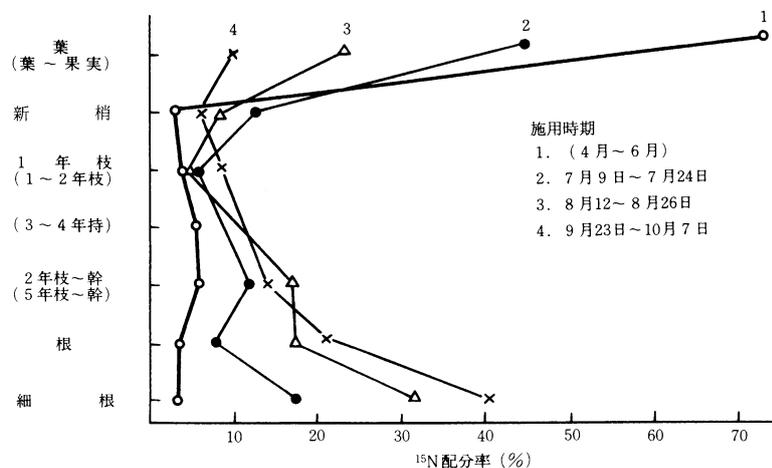


図1 重窒素標識硫酸の施用時期とその樹体内配分率
 注)括弧内は8年生樹の鉢試験(福島果試、未発表)、それ以外は4年生樹の砂耕栽培(望月ら、1968)

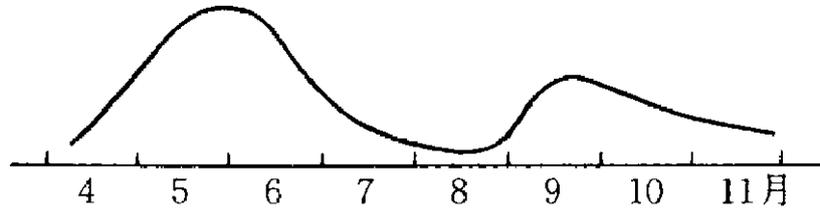
【高密度植わい化栽培に対する試験研究の状況】

3か所の現地ほ場にて、ふじ/M.9を用い、窒素施肥量を慣行量、半量および無施用として、2年間試験を行ったが、生育、収量および果実品質に悪影響が認められなかった。現在、同一処理で継続して試験中である。

★**高密度植わい化栽培**とは、栽植本数を250本/10a以上とし、樹高を3.5mとする栽培方法である。新わい化栽培(125～200本/10a、2.5～3.0m)よりも栽植本数が多く、樹高が高い。

(2) 理想的な窒素吸収のイメージ

窒素施肥の時期別効果を踏まえた理想的な窒素吸収のイメージを図2に、また、地力窒素発現量も加味したより現実的な窒素供給のイメージを図3に示す。



多すぎてあと効 きしないように する。	なるべく窒 素がきれる ようにする。	年内に吸える くらい施す。
---------------------------	--------------------------	------------------

図2 窒素の理想的な吸わせ方 (森ら 昭33)

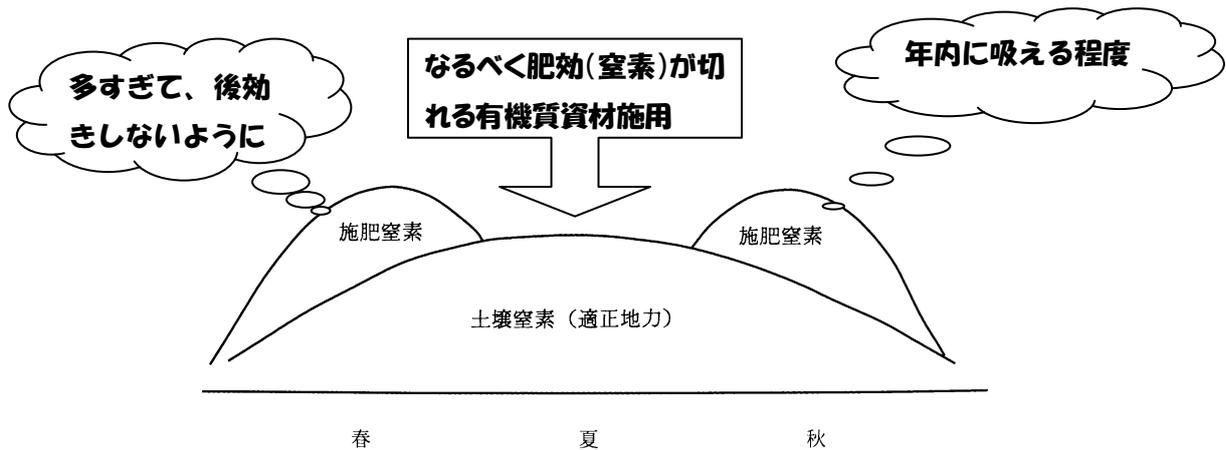


図3 地力窒素を基本にした窒素供給法の模式図 (佐藤)